

2012「東ティモールフェアトレードコーヒー生産者を訪ねる旅」報告

ほっかいどうピーストレード 荒井久代



はじめに

2012年8月4日～12日、パルシック主催の「東ティモールフェアトレードコーヒー生産者を訪ねる旅」が開催されました。「ほっかいどうピーストレード」では、毎年メンバーがこのツアーに参加し、生産者と交流したいと考えています。去年は八木田さんが参加してくれましたが、今年は皆さん多忙のため、また私が行って来ました。4回目の参加です。

日程はこれまでと同じで、ディリ 1泊→マウベシ 1泊→生産者の集落 2泊→マウベシ 1泊→ディリ 1泊です。今年のコーヒーは大豊作。生豆 80 トン出荷との予測も聞かれました。パルシック現地スタッフも生産者も超繁忙期の中でしたが、私達を歓迎してくれました。

ツアー参加者は 20 代～30 代を中心にした男女 11 名とパルシック東京事務所のスタッフ 1 名。東ティモールのことは知らなかったという 20 代の方が 2 人いましたが、東ティモールは 5 回目というリピーターも。皆さん笑顔で、生産者との交流を楽しまれました。

ここでは日程にそって、主な報告をします。感想が多く読みにくいかもしれませんが。

なお、8月10日に訪問した NGO「LA`O HAMUTUK」での国家経済開発の講義は、調査報告を中心にした説得力のある内容でしたが、私は、マウベシからのカーブ路にゆられたあとで頭が働かず、ほとんど記録ができませんでした。概要としてまとめましたが、数字などまったく不十分なものです。そのため引用などお断りいたしますが、関連論文は web で見ることができますので、お調べいただけますよう、お願いします。

ディリでのオリエンテーションと資料館見学

■ 整備されるディリの街並み

8月5日、バリ島のデンパサール空港から2時間、メルパチ機はディリに到着しました。空港ではパルシック東ティモール事務所の伊藤淳子さん（以下淳子さん）と大坂智美さんが笑顔で出迎えてくれました。今年は3台の車で移動することになりました。

空港の外には真新しいホテルの大看板が立っています。しばらく走ると 2 年前に建設中だった大型ショッピングモール「ティモール・プラザ」がオープンしていました。地下 1 階、地上 4 階建て。地階がシンガポール資本のスーパーやフードコート、1 階がブティックや土産物店、2 階が貸事務所、3 階以上がアパートです。(マウベシから戻って昼



ティモール・プラザ

間の時間帯に入りましたが、混んでいませんでした。近代化とは無縁のレブルリ集落との差に、人々がレジに並ぶ姿を想像できず、どこか遠い「外国」にいる気分でした。)

バブリーだと聞いていましたので、2 年前に、豪華な新築の大統領府を見たときほど驚きはありませんでしたが、市内のあちこちで道路工事と建物や庭の改築が目につきました。政府庁舎前の庭は、改装のために穴を掘ったところ多くの遺骨が出てきたそうで、工事が中断していました。淳子さんによると、インドネシアの虐殺によるものではなく、第二次世界大戦時に日本軍の侵略で犠牲となったオーストラリア人あるいはポルトガル人のものではないかと推測されているとのこと。日本が東ティモールに対して戦後補償を何もしていないことを想起させられます。日本の問題として検証してほしいと思いました。

街は車やバイクが増え、夕方は渋滞にも遭遇しました。黄色いタクシーは数人でシェアして使っているのをみかけ、繁盛しているようでした。海の美しさは変わりませんでした。ビーチの一角はおしゃれなコンクリート製のベンチが並ぶ小公園になっていました。

石油景気と消費拡大の波の中で、人々は仕事を得ることができているのでしょうか。夕食に入ったレストランでは小学校高学年か中学生くらいの男の子が土産物を売りに来ていました。物売りに歩く子どもは減っていないのかもしれませんが。

■伊藤淳子さんのオリエンテーション

8 月 6 日午前パルシック東ティモール事務所でオリエンテーションがありました。

私は「ほっかいどうピーストレード」から、ココマウ (COCAMAU: マウベシ郡コーヒー生産者協同組合) への、北海道米の収益金 1000 ドルの寄付を、淳子さんに託しました。コーヒーが不作だった 2008 年に北海道米の収益金を送り、現地でお米や油を購入してもらい、生産者にクリスマスプレゼントをしました。以来、毎年続け、お金の使い方は現地にお任せしています。淳子さんのお話の概要は次の通りです。



伊藤淳子さん (左) に寄付を託す

(1) コーヒー生産者支援の歩みと組合活動の再出発

1999 年 10 月、パルク (2008 年に民際協力事業とフェアトレード部門がパルシックとして分離) では他の団体と一緒に東ティモール市民平和プロジェクトを立ち上げ、緊急支援に入りました。

2002年5月に独立を果たし、東ティモール人の手で国づくりを始めましたが、独立後の方が大変ではないかと考え、2002年から、マウベシの34世帯を組織し、コーヒー生産者支援を始めました。いいコーヒーをいい値段で市場に届けようと、2003年には6集落200世帯に広げ、翌2004年にココマウを結成しました。

2003年からJICAの草の根技術支援事業の支援を得て、コーヒーの品質改善に努めました。第二期は組合強化を図りました。東ティモールは長年の植民地支配の影響で、自分達で決め管理し責任をとることをさせてもらえなかったため、組合という組織を管理、計画、実行することは大変難しいことでした。JICA最後の3年間は、コーヒー生産者協同組合モデルをマウベシ以外にも普及させようと他のNGO、政府の協同組合局と連携をとりました。

2011年、ココマウは大危機にみまわれました。事務局長兼会計役は月100ドルの給料が支給されましたが、役員5名は名誉職で、協同組合局からの助言で報酬は結果後ということになりました。法人化と銀行口座を持つことを目指し、内心不満を抱えながらも従ってきましたが、組合の資金4000ドルを役員で分けてしまったのです。パルシクではココマウの自立を見届けることを目的にやってきたので、ショックでした。「見過ごすことはできない、不正を正さなければ市場は提供できない」と伝えました。

他の組合員たちは市場がほしいというので、2011年、資金をグループに分け、小規模運営しつつパルシクが出向く形になりました。小規模化で組合が身近になるというメリットもあります。組合は本当に必要なかを再考した時期でもありました。そして、協同組合局のトレーニングを受けつつ、ココマウは再出発しました。2012年は15集落285世帯が加入しています。6月には新役員も決まりました。JICA事業で購入した加工資機材が組合の資産になっています。

今回研修に行くレブルリは15世帯、今年から加入したところです。近隣には、ココマウ初代組合長のビットリーノさんのいるルスラウがあり、いい影響を受けています。

マウベシのコーヒー生産者の収入の9割はコーヒーです。コーヒーの国際市場価格が生産者を直撃します。フェアトレード価格を守っていますが、値下がりすると生産者は苦しくなります。ココマウの他の商品では、大豆の共同出荷は失敗しましたが、現在、女性グループがハチミツとハーブティー、サツマイモチップスを生産しています。

(2) 東ティモールの現状

東ティモールは今年、独立10周年を迎えました。今年、5年ごとの選挙年でもあります。7月7日には国民議会選挙があり、シャナナ支持が票を増やしました。8月7日には組閣が発表になります。

2007年以降、石油収益で、インフラ整備、公共事業も増えましたが、この恩恵を受ける人はディリに集中しています。ディリでは大型ショッピングモール「ティモール・プラザ」もオープンしました。この間に、都市と地方の格差が広がり、貧富の差が生まれ、村の人たちの生活は苦しくなっています。



レブルリの小学校

東ティモールのコーヒー生産量は多くて年1万トンか2万トンで、輸出高は国家予算の1%に過ぎません。将来を担っていける産業とは必ずしもいえないかもしれませんが、石油はいずれ枯渇します。コーヒーを買い支えていくフェアトレードの取り組みが希望を与えます。

(3) 学校教育について

独立後、東ティモールはポルトガル語とティトゥン語が公用語になり、学校ではポルトガル語で教育することになりました。しかし、ポルトガル語を話せるのは、人口のわずか5%です。山奥までポルトガル語の指導者が派遣され教員を特訓しましたが、この10年で、ポルトガル語で授業ができる教師は育ちませんでした。子供たちは学校へ行っても、教師がポルトガル語の勉強に出かけていない状態で、この10年、子ども達がかわいそうでした。今、ティトゥン語、あるいは他の言語を母語として使う試みが始まっていますが、母語はティトゥン語にすべきだと思います。ティトゥン語を整備し、ティトゥン語の教材作りをしていかないと、教育が機能しません。

小・中学校の授業料は無料です。村々に小学校はありますが、中学・高校は町にしかありません。ディリには国立大学1校、私立大学2校、その他専門学校などがあります。

小学校を卒業する子どもは、全国平均で50%、地方では20%しかいません。クロロ集落のように、通学に川を渡って険しい道のりを1時間かかるようなアクセスの悪さも原因しています。また、政府に予算がないので教員の数が足りず、無償のボランティア教員に頼っている状況です。コーヒー生産者の年収は高値のときで平均340ドル。教師は月230ドルです。

(4) 主なQ&A

Q：農地について

A：東ティモールの土地法はまだ制定されておらず、農地改革はなされていません。マウベシが小規模なのに比べて、エルメラ県は大規模プランテーションだったところ。国家管理の土地を周辺住民が使っています。政府は外国資本に貸したいと思っているようですが、自分達の手に土地を取り戻したいという生産者は危機感を持っています。

Q：東ティモールの平均年収は？

A：年収500ドル弱、都市は月300ドルくらいです。

Q：食べ物は自給できているのか？

A：イモ、トウモロコシなどは自給できています。お米は主に輸入米を買っています。コーヒーの収穫期は3ヵ月で、その他の月はトウモロコシやインゲン豆を栽培しています。

Q：コーヒー畑の手入れと有機栽培について

A：コーヒーは本来、トップングや剪定など、手入れをしなければならないのですが、東ティモールの人はしていない。新しく畑を増やしたりはしています。政府の目標は米の自給達成で農薬を使っているところもありますが、コーヒーは有機栽培を守っていくと

して、農薬も化学肥料も使っていない。コーヒー生産者も農薬を一度使うとダメージが大きいことを知っているので、使いたがらない。収穫の1ヶ月前に下草狩刈りをするが、除草剤は使わない。コーヒーの不作の原因は、裏作と天候に左右されることです。

■元受容真実和解委員会事務所見学

2001年、国連暫定統治機構が、刑務所だった建物にインドネシア支配下で起こった人権侵害の実態調査のために同委員会を設置し、さまざまな調査報告が行われた。現在は資料館として一般公開され、拷問のあった牢も見学できます。8月6日、オリエンテーション後に、私は一昨年に続いて2回目の訪問です。今回は二つの別室を初めて訪れました。

一つは1991年11月12日に起こったインドネシア軍の無差別発砲によるサンタクルズ虐殺事件のコーナーでした。外国人ジャーナリストが撮ったという現場写真や犠牲者の顔写真が展示されていました。10人ほどのスタッフは「私たちはみんなあの事件の生き残りです」と話し、当日着ていたシャツも見せてくれました。もう一つは、自らも刑務所に収監されていたという女性が、刑務所で行方不明になった人の写真を展示していました。どちらも、この事件を風化させまいという、静かだけれど強い信念に満ちた場所でした。



シャツを手に丁寧な説明

24時間電気が供給されるようになったマウベシの町

8月6日午後、例年のようにハリラン市場で収穫用の籠（ボテ）と民泊用の食糧を（私は小さな激辛チリを）買いました。物価が上昇しているらしく、お土産に買った塩は4年前の2倍の値段でした。そして、カーブだらけの急勾配の道を上って、3時間半。酔い止め薬を飲んで眠ってしまい、目が覚めたらマウベシは日も暮れ、寒いくらいの気候です。

マウベシ郡長さんに挨拶に行った後、いつものレストランでパルシク現地スタッフと夕食会です。私の息子と呼ばれている仲良しのネルソンさんは、HOKKAIDOと書かれたキタキツネ模様のTシャツを着て、出迎えてくれました。市場で見つけて買ったのだとか。なんてやさしい人なのでしょう。北海道へ帰ったら報告したいと思いました。

特筆すべきは、マウベシでは夜6時間だけ供給されていた電気が、2012年4月から、24



北海道Tシャツ姿のネルソンさん

時間供給されるようになったことです。とはいえ、町のお店の電灯は豆電球より少し明るい程度です。宿泊先のHotel Pousada.では、以前のように限られた時間内でシャワーを浴びる心配はなくなったとはいえ、時々停電したり、ブレーカーが落ちたりしました。

7日朝は2010年末に移転したというパルシクマウベシ事務所に寄りました。マウベシ病院近くの政府の建物の

半分を借りたとか。以前よりずっと広い所で、便利そうでした。

2年前と変わらぬ佇まいのマウベシ市場で食糧を買い出しして、レブルリへ出発です。私はウィスキーと書かれた1瓶2ドルのお酒を買いましたが、淳子さんにラベルを読んでもらうと「もち米でできたウィスキー風味のお酒」でした。

正式なおもてなしで歓迎してくれたレブルリ

■歓迎のセレモニー

マウベシからレブルリへの道は急坂が続く難所でしたが、車で1時間半、レブルリの小学校に到着。冬休みで誰もおらず、職員室を私たちの寝床に開放してもらいました。床はコンクリで、パルシック持参のマットを敷きつめ寝床にしました。別棟の教室は竹壁で小屋の域を出ません。教材とおぼしきものは職員室の人体模型4体。教室には少しの椅子と黒板だけで、何もありません。数年前とまったく変わらない状況でした。小学校を少し下ったところに加工場があり、広場には太い青竹を骨組みにして、ビニールシートで囲った大きな食堂兼ダンスパーティー会場が作られていました。少し離れたところに、穴を掘り小屋掛けで作ってくれたトイレもありました。

集落や近隣の人たちが次々と集まり、出迎えのセレモニーが始まりました。まず、集落の女性がツアーの代表4人の首にタイスの織物を掛けてくれます。続いて、大きな木の下に案内され、レブルリ代表のマティアスさんから、ママ（ビンロウジの種子を石灰と一緒に噛むもの）と、トウモロコシの皮に煙草の葉を巻いた煙草がふるまわれました。コーヒーとふかしイモも出され、これらが正式なおもてなしセットのようでした。



タイス、ママ、煙草での歓迎

■新組合長のオリエンテーション

自己紹介と日本からのメッセージ旗贈呈が済んだあと、コカマウの新組合長でマネトゥウ村村長代行のアルフレドさんから次のような挨拶と説明がありました。

（1）コーヒー加工のプロセス

マネトゥウ村では5集落を組織しています。コーヒーはずっと以前から栽培していました。シェードツリーのモクマオウを植え、大きくなったら下草刈りをしてコーヒーの苗

を植えます。3年から6年で収穫できます。ココマウに入る前は好きなように加工していたが、入ってからはよいコーヒーを生産するための努力をしている。収穫したチェリーはその日のうちに加工している。



旗を受け取る新組合長（前左）

加工のプロセスは、①収穫してきたチェリーは、乾いたものや未熟ものは取り除く→②水を張ったバケツの中に入れて浮き豆を除去→③機械（動力付または手動）で果肉を除去（これをパーチメントという）→④パーチメントを入れたバケツに水を入れ、蓋をして24時間おいて発酵させる→⑤水洗い→⑥水気を切ったらシートに広げ選別→10日ほど天日干ししながら選別する。→⑦パーチメントの水分量が10～10.9%になったら出荷する。見た目のよくないものは2級品とする。

東ティモールのコーヒーは外国から持ち込まれたもので、リキサ県では荒地にコーヒーが育ったのを外国人がを見つけ、苗を各地に広げたという。シェードツリーは、自生のネムの木、外来種ネムの木、モクマオウの3種類ある。コーヒーはもともとアラビカで、リキサ県で出現したのはアラビカとロブスタの混合である「モコ」です。

（2）主なQ&A（特記ないものは組合長の回答）

Q：どういう気候だといい豆がとれますか？

A：雨が降る時期も影響する。11月にコーヒーの花が咲くとき、いいタイミングで雨が降るといい。降りすぎても降らなすぎてもよくない。マウベシの中でも暑い地域と寒い地域があり、ここは標高が低く暑い地域。寒い地域は収穫が始まるのは6月で雨が少ないが、ここは雨の多い5月に始まる。雨でチェリーが落ちてしまうこともある。

Q：苗木はグループで作っているのか、それぞれの家で作っているのか？

A：コーヒー苗は各農家で落ちたコーヒーが発芽したものを植え替えている。シェードツリーは各農家が川べりや畑の中に出てきたものを植えている。ケリコリでは今後は苗床作りをしたいと思っている。

Q：不作のとき、自家用はあきらめるのですか？

A：不作のときは出荷し、自家用は人から買う。普段は必ず自家用はとっておく。

Q：組合に入った理由は？

A：以前はディリなどに売りに行かなければならなかった。物理的な距離を縮めたかった。マウベシの中で市場を広げられれば、労働の軽減になります。

A（副組合長でマラウイ代表・アラリコさん）：グループで協働するのはいいことです。普通の市場に出していたら、誰が買ってくれたのかわかりません。ココマウに入ると生産者のことを知ってもらえます。

Q：有機栽培を続けたいか？

A（副組合長）：自分達の方法を続けたい。化学肥料はコーヒーをだめにしてしまう。

Q：組合に期待すること

A：自分達の暮らしがよくなることです。変化がないといけないと思っている。

■カンタ！ コーヒー生産者の歌

その後は遅い昼食です。高級品の肉料理や野菜炒め、焼きそば風ラーメン炒めなどのごちそうが（激辛チリもペーストされ）ご飯とともに出されました。私たちが食べた後でないと、集落の人たちは食事をしません。これもおもてなしのマナーのようでした。

食後にはビットリーノさんも顔を見せてくれました。とてもお元気そうでした。

夕方は持参したボールでサッカーやバレーボールが始まりました。子どもたちの運動神経は抜群です。縄跳びも大人たちに好評で、淳子さんの連続二重飛びにもびっくり。

私はエゴ・レモスさんの「TO`OS NA`IN」を日本から練習して行きました。この歌は、一昨年ロビボ集落の子どもたちに教えてもらいましたが、その時は覚えきれず、今度こそみんなで歌おうと思ったのです。よく聞き取れなかった「カフェ・マナス・コプ・イーダ（一杯の熱いコーヒー）」が一番大事な歌詞だと淳子さんに教えてもらいました。「farmers」という英訳のついたこの歌は、熱いコーヒーを飲んで働くコーヒー生産者の歌なのですね。

そして私が「TO`OS NA`IN」を歌い始めたところ、子どもも大人も集まってきて、集落中の大合唱になりました。パルシックの3人のアルバイト運転手さんも、私のことを「アマー（お母さん）」と呼んでは、いろいろ気遣ってくれて、一緒に歌い出します。淳子さん曰く「息子が3人増えましたね」。歌の力で言葉がなくても仲良くなれました。今度行かれる方には東ティモールの歌を、覚えていかれることをおすすめします。

コーヒーの収穫と加工作業の実習

■コーヒーチェリーの収穫と脱肉

8月8日晴れ、収穫日和です。みんなで近所の畑にコーヒーチェリーの収穫に行きました。

真っ赤な実だけ、根元を摘み取らないように収穫するよう代表から説明がありました。畑のコーヒーの木は剪定していないらしく、高いところにたくさんチェリーがついているので、枝に飛びついて引っ張って収穫します。こども達も大勢やってきて、一緒に歌を歌いながらお手伝いです。2時間ほどで20kgほど収穫しました。20kgのチェリーは、4kgのパーチメントに、1.5kgの焙煎コーヒーになるという説明を受けました。





作業場に戻って、シートにチェリーを広げ、青い実や黒く変色した実などを除きました。続いて、水をはったバケツにチェリーを入れて浮き豆を除去し、電動の果肉除去機で果肉を除去。このパーチメント（白豆）を水に浸けます。果肉が残っている豆がかなりあります。このときに手作業で果肉をきれいに取り除かないと、こびりついたまま乾いたり、発酵臭が残ったりします。冷たい水に手を入れ、1時間ほど作業をしましたが、かなり大変でした。主に女性達の仕事だそうです。そして、蓋をして24時間おき、発酵させます。

■夜通し続いたダンスパーティー

夕方からずっとダンス音楽が鳴り響き、近隣の集落からも人が集まり始めました。日も暮れた頃には、会場はあふれんばかりになり、ダンスパーティーが始まりました。今回のツアー参加者はダンス人口が高く、ほとんどの人が誘われると断ることなく踊っていました。特に、マレーシアから参加したナツミさんは本物のダンサー並に難しいステップでも早い曲でもなんでも踊れますので、男性が次々誘いに来ていました。夜11時ころにはネルソンさん他マウベシスタッフも駆けつけ、パーティーに加わり、朝の5時ころマウベシに戻っていきました。超繁忙期なので寝ずに朝からの仕事に戻ったのです。タフなダンサーたちばかりで、夜通し、パーティーは続いたのです。

■パーチメントの乾燥と選別作業

8月9日晴れ。午前中は、まず家主の女性の案内で民家を見学させていただきました。草で葺いた円錐形の屋根の中は土間で、板を渡した小上がりのようなベッドが作られています。台所は大きな石三つのカマドと小上がり。女性はこの台所で出産し、産後1か月は外に出られないと話していました。合計特殊出生率6~7です。女性たちは逞しいです。

続いて天日干しをしながらの選別作業の実習です。昨日加工したものは発酵途中なので、すでに半乾きの別のパーチメントの選別をしました。シートに広げると、果肉がこびりついているものがたくさん混じっていました。こうなると除去するしかありません。昨日の作業過程が大切なのです。緑色の豆（未熟豆を果肉除去機にかけると果肉だけでなく薄皮まで剥けて緑豆になる）、欠けている豆なども混じっています。これらも除去しました。今年から参加した集落なので、まだ加工作業に慣れていないようでした。

埼玉県川口市から参加したタカノコーヒーの若い社長さんは、普段は楽しい方でしたが、選別作業となると真剣そのもので、プロの眼差しに感心しました。



強い日差しの中での 2 時間ほど選別作業で、手の甲と片側の顔が真っ赤に日焼けしてしまいました。生産者はこれを何日も続け、品質管理に努めているのです。大変な作業です。

■なごり惜しいお別れ

午後はお別れ会です。2 泊 3 日の交流は濃厚で、すっかり仲良くなった集落の若い人たちとツアーの若者は涙ぐんでいます。恒例のウルルン滞在記になりました。

私達はメッセージを書いたボテをプレゼントし、生産者からはパーチメントをおみやげにいただきました。

マウベシではパルシック事務所で料理上手なアンジェリーナさんの手料理が待っていました。夕食後はスタッフとの交流会。ネルソンさんからパーチメントの加工方法を教えてもらった後は、彼のギターと私のパーカッションで、母子共演の「TO`OS NA`IN」と「Masi Olarinda」です。みんな輪になって踊ってくれました。ネルソンさんは終わりの挨拶で「生産者のことが好きなので、生産者と共に仕事ができることが幸せです」と話していました。



レブルリでのお別れ会

8 月 10 日晴れ。マウベシ教会前の倉庫を見学。次々とパーチメントが運び込まれています。倉庫の外ではネルソンさんたちが A（最高級品）と B（次点品）に袋ごとにランク付けしていました。A は 1 kg 2 ドル 40 セントで購入しているそうです。今年の豆は大粒で、ピカピカの高品質です。倉庫の中は、20kg 入袋に集落名と個人名（以前は集落名のみ記載）とランクが書かれて、山積みになっていました。80 トンの生豆出荷が予測される中で、近々、倉庫もいっぱいになるのでしょう。



続々と届く高品質のパーチメント

私は高齢なのでもう来られないかもしれないと常々思っていますが、一昨年の別れるときはネルソンさんの「ネクストイヤー、プロミス」の言葉で送られ、今年は、ネルソンさんに「元気だったらまた来るから」と自ら「プロミス」してしまいました。

NGO「LA`O HAMUTUK」での講義

■国家経済開発の現状と問題点

8月10日午後、マウベシから戻り NGO 訪問。まえがきにも記しましたが、十分な記録が取れませんでした。とてもいいお話だったので、できれば疲れていないときに聞きたかったです。本当の概要ですが、スタッフのジュビナルさんのお話は次のようなものでした。

「LA`O HAMUTUK」はティトゥン語で「一緒に歩む」という意味で、東ティモールの開発の進展状況をモニターし監視するために、12年前に国内外の活動家により設立。特に経済や天然資源にフォーカスを置き、農業分野では食の安全をメインにしています。

もうひとつのテーマは正義です。この国は罪を問わないが、罪はきちんと裁かれるべきと考えています。スタッフは8名。うち2名は外国人です。私は経済学者ではありませんが、今日は東ティモールの国家経済開発について、調査報告をします。

(1) 石油への依存

東ティモールは世界で二番目に石油に依存している国です。貧困ライン（1日1ドル以下）で暮らしている人が41%~50%。人口の8割が農村地帯に暮らしています。毎年2000人のこどもが5歳以下で死亡しています。主な産物のコーヒーの輸出は2010年で1600万ドルなのに対し、輸入は2億4600万ドルで、2億円を超える貿易赤字です。あらゆるものを輸入に頼っています。2024年までに36万人の赤ん坊が生まれますが、この頃には油田は枯渇します。子供たちの将来をどう保障するのでしょうか。

2012年の国家予算は16億7400万ドルで、その89%が石油基金から引き出されたものです。ものすごく油田収益に依存しています。その使い道は、道路や電気などのインフラに53%が充てられ、教育・保健は10%、経済・農業関連の開発は3%にすぎません。GDA国内再生産は37億5000万ドル。石油収益の75%で国家財政の97%を占めています。国内再生産は油田が枯渇する2024年には減り始めます。今採掘している油田は昨年度でピークを過ぎました。石油依存の悲劇が始まっています。政治家は石油がいつまでもあると思っているようです。政府は、長期計画という現実性に欠け、輸入に依存し、石油以外の開発をないがしろにしていますが、人口増、インフレ、若者の失業対策もしっかり考え、国内経済をいかに発展させるかが重要になります。

(2) 円借款など外国からの借款の開始

独立10年目にして、日本からの借款をかわきりに海外からの借款が始まります。日本は2012年、53億円の借款を決めている。これで、ディリと第二の都市バウカウを結ぶ国道1号線整備事業を行う予定です。さらに、南海岸に空港、高速道路、石油の精製工場を作る夢のような計画がありますが、この計画で農民は立ち退きを迫られ、就労の機会はごく一部に限られ、環境破壊にもつながり、石油依存がさらに大きくなります。借款

は返済しなければなりません。利息は固定だが、レートが変われば負担は大きくなる。油田収益がなくなれば、こども達に借金を残していくことになります。

(3) 主なQ&A

Q：政府への提言は？

A：議員などへ国内経済に予算を割くべきと提言しているが、聞いてもらえない。

Q：ラオ・ハムトックに近い考えの政党はありますか？

A：フレテリンですが、第二党で野党です。その他に2つの政党がありますが、選挙で議席をとれませんでした。

Q：持続可能な国内産業はなにか？

A：人口の8割が農民です。農業の発展を図るべきですが、輸入依存が、国内農業を市場につなげることを難しくしている。現在、輸出の96%はコーヒーです。コーヒー以外の輸出作物の開拓や小規模事業なども発展させていくべきでしょう。

Q：コーヒー以外にどんなものがあるか？

A：イモやトウモロコシ等あるが、輸出を増やすより輸入を減らしていくことが大事です。

Q：食料自給率はすべての土地を使えばまかなえるのか？

A：可能と考えている。ロスパロスなど、広大な農地が使われていません。人々の食に関する意識変革も必要です。たとえば、ロスパロスではトウモロコシが主食でしたが、インドネシア時代に米を食べなければならなかったと思ってしまったのです。

Q：ディリの人口集中の問題と南海岸の開発についての意見は？

A：中央集権を地方に分散させることが大切です。南海岸の開発では就労機会は小さく、求人は専門知識のある人100人くらいです。人口の70%を占める農民が土地を失い、0.1%の仕事を取り合うことになる。油田が枯渇すれば、結局、農業が立ち行かなくなる。

コーヒー加工場（脱穀）の見学

8月11日、コーヒー加工場 PT Nakroman を見学しました。最終工程の、パーチメントを機械に通し、生豆にする作業です。シルバースキン（薄皮）がはがされた生豆は、大きさがA、B、Cに選別されて出てきます。

この「脱穀機」（写真上奥）の前に手作業で行う選別のコーナーがあり、大勢の女性達がATJ（オルタ・トレード・ジャパン）の生豆の選別をしていました。ATJのスタックも来ていました。選別台を使わずに袋の中にある生豆をいじくっている女性達がいきましたが、淳子さんによると「だめだし」が出たのではないかとのこと。パルシックもここに「脱穀」を頼んでいます。



ATJ 日本人スタッフは、エルメラ県の 800～1500 メートルの生産者と連携し、組合はないが地域のスーパーバイザーとやりとりしていること、今年の生豆は 66 トンで、54 トンが日本向け、12 トンが韓国に輸出されることなど説明してくれました。

おわりに

マウベシからディリに戻ると、第二期シャナナ連立内閣が発足していました。私が初めてツアーに参加した 2007 年も選挙年で、不満を持つ人々が港の税関を焼き討ちし、私達は帰国に際し、国連に守られながら空港へ向かうという経験をしました。今年は、国民議会選挙後に事件があったようですが、組閣が発表になっても、暴動は起こらず、静かでした。

レブルリ集落の夜、霧が立ちこめて、あたりが真っ暗になったとき、運転手の J さんが「本当に真っ暗で、独立したのはディリだけみたいですね」と話していました。灯りのことだけではないのでしょうか。都市と地方の格差が広がっているといえます。コーヒー生産者にとって、フェアトレードの取り組みが希望につながりますように。

今回のツアーで、ココマウの組合員の方から「組合に入れば生産者のことを知ってもらえる」という声を聞き、フェアトレードへの期待を感じて帰ってきました。帰国後の 10 月上旬、淳子さんからのメールで、パーチメントが 135 トン以上集まり、生豆の出荷は 90 トンを超えるようだとの情報がありました。昨年と比べると倍増ですが、裏作と気候の変動に左右され、来年は未知数です。安定した市場の開拓が、大きな課題でしょう。

「ほっかいどうピーストレード」の取り組みは微力かもしれませんが、継続こそ力です。これからも『東ティモール・マウベシ珈琲』を広めていきたいと思えます。

NPO 法人 ほっかいどうピーストレード
〒003-0803 札幌市白石区菊水 3 条 1 丁目 6-12
TEL/FAX 011-812-4377
hokkaidopeacetrade@gmail.com
<http://www13.atwiki.jp/hptrade/>
2012 年 11 月 写真・編集：荒井久代